科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））研究進捗評価

課題番号	20220011	研究期間	平成２０年度～平成２４年度
研究課題名	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究	研究代表者（所属・職）	神庭　信幸（東京国立博物館・学芸研究部保存修復課・課長）

【平成２３年度　研究進捗評価結果】

評価		評価基準
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（意見等）

本研究は、博物館において測定環境データ等をもとに適切な対策を速やかに取れる保存管理システムを構築することを目的とし、研究は計画に沿って順調に行われている。

例えば、館内に設置した温湿度計からのデータをその位置情報と共にモニタリングして資料の収蔵環境を管理するシステムの開発や、過去の資料保存カルテの電子化等を行い、当初計画に従って研究は進んでいる。

ただし、システムのハード面の開発についてはこれまで順調に進められているが、そのシステムが、温湿度から空気汚染、振動・衝撃、生物生息状況といったきわめて多様なデータをどのように総合的に評価し最適な管理を提案できるか、また東京国立博物館以外の博物館にも適用できるかというソフト面の問題は研究期間内での大きな課題である。結局は東京国立博物館にハードを導入し個別の研究を行っただけという最終評価を受けないよう、今後も着実に研究を進めてもらいたい。システムの評価は国内においてだけでなく、今後予定している国際シンポジウム等で国際的にも行ってほしい。また今回の研究成果は他の博物館でも利用可能なものとし、公表して我が国の博物館に普及されるものとなることを期待する。

【平成２５年度　検証結果】

検証結果	
A	研究進捗評価結果どおりの研究成果が達成された。 文化財の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムを確立するために各サブシステムを完成させ、その確認を実践的に行っている。文化財の保全に向けた実空間での対処と、処置の結果をデータとして確認・分析・評価・判断する情報空間とが高度に統合されたシステムが完成しており、具体的で着実に、当初の予定どおりの成果が達成されている。その結果として臨床保存が修復保存から予防保存へとシフトし、文化財の保存と公開を持続的に行うことのリスク回避に役立っていると判断される。 また専門外の者がさまざまな情報を閲覧することができることは、博物館の組織として重要なことである。 システム開発で得られた知見は、他の博物館にとっても有用なものである。今後は、当該システムから得られた研究成果のうち、他の博物館でも導入可能なもの（ハード面）、利用可能な知見（ソフト面）について更なる論文発表、教育普及活動を行うことによって、研究成果をより社会的に周知させることを期待する。